

第三章 シビックで朝まで

東野圭吾

2021年12月12日

1

かいさつぐち うでどけい にほん はり
改札口を出て腕時計を見ると、二本の針は午後8時半を少し過ぎたところ
を指していた。おかしいなと思い、しゅうい あん じょう じこくひょう
周囲を見回した。案の定、時刻表
の上に取り付けられた時計は、八時四十五分を示している。浪矢貴之は
ゆが
口元を歪め、舌打ちした。オンボロ時計め、またくる
狂ってやがる。

大学の合格祝いごうかくで父親ふいかもらった時計は、最近になって不意に止まる
ことが多くなった。20年も使っていれば当然か。そろそろクォーツ
に買い替えようかなと考えた。すいしょう はっしん かつき
水晶発振方式の画期的な時計は、かつて
は軽自動車並みの値段がしたが、最近では急速に低価格化かかくしている。

駅を出て、商店街を歩いた。この時間になっても、まだ開いている
店があることに驚いた。外から覗いた限りでは、どの店もなかなか
はんじょう
繁盛しているらしい。ニュータウンができて新しい住人じゅうにんが増え、駅前商
店街の需要じゅうようが高まった、と聞いたことがある。

こんな地方の、ぱっとしない街がねえ、と貴之は意外に思うが、生まれ育った土地に活気が戻っているという話を聞いて悪い気はしない。それどころか、せめてうちの店もこの商店街の中にあったならな、などと考えてしまう。

商店街の並ぶ通りから脇道に入り、しばらくまっすぐ歩いた。すぐに住宅の建ち並ぶエリアに入った。この辺りは来るたびに景色が少しずつ変わる。新しい家が次々と建っていくからだ。それらの住人の中には、ここから東京まで通勤している者も珍しくないという。特急電車を使っても、二時間はかかるだろう。自分にはとてもできない、と貴之は思った。彼の現在の住まいは都内の賃貸マンションだ。狭いながらも2LDKで、妻と十歳の息子と三人で暮らしている。

しかし、と思い直した。ここから通うのは無理だが、立地条件について、ある程度は妥協する必要はあるかもしれない。人生は、自分の思う通りにならないことの方が多い。通勤時間が延びるぐらいのことは我慢すべきだろう。

住宅地を抜けると、T字路に出た。右折し、さらに歩いていく。緩やかな上り坂だ。この辺りなら、目を瞑っていても歩ける。どれだけ歩けば、道がどの程度に曲がっていくか、体が覚えている。何しろ、高校を卒業するまで通った道だ。

やがて右前方に小さな建物が見えてきた。街灯は点っているが、看板の字は煤けていて読みにくい。シャッターは閉まっていた。

店の前で足を止め、改めて看板を見上げた。ナミヤ雑貨店—近づけば辛うじて読める。

隣の倉庫そうことの間に、幅一メートルほどの通路つうろがある。貴之は、そこから店の裏側に回った。小学生の頃は、ここに自転車を止めていた。

店の裏には勝手口かってぐちがあった。ドアのすぐ横に牛乳箱が取り付けられている。牛乳を配達してもらっていたのは、十年ほど前までだ。母親が亡くなって、しばらくしてからやめた。しかし牛乳箱はそのままだ。

牛乳箱の脇わきにはボタンが付いている。押せば、昔はブザーなが鳴った。今は鳴らない。

貴之はドアノブを引いた。やはり抵抗あなく開いた。いつもこうだ。

靴脱ぎくつぬには、見慣れたサンダルと、古びた革靴ふるかわぐつが並んでいた。どちらも所有者しゅゆうしゃは同じだ。

今晚は、と低く声をかけた。返事はなかったが、構かまわずに進んだ。靴を脱ぎ、上がり込んだ。入ってすぐのところが台所だいどころだ。その先には和室があり、さらにその向こうが店舗てんぽになっている。

雄治は和室で卓袱台ちゃぶだいに向かっていた。股引ももひきにセーターという出で立ちで、正座せいざをしている。そのまま顔だけをゆっくりと貴之の方に向けた。老眼鏡ろうがんきょうを鼻先にずらしている。

「何だ、おまえか」

「何だ、じゃないよ。鍵かぎがかかってなかったぞ。戸締りとじはきちんとしろって、いつもいっているだろ」

「何か聞こえてたが、考え事をしてたので、返事をするのが面倒だったんだ。」

「また、そういう負け惜しみま おを」 貴之は持参じさんしてきた小さな紙袋かみぶくろを卓袱台ちゃぶだいに置き、胡座あぐらをかいた。「ほら、親父の好きな木村屋のあんぱん

だ」

おう、と雄治は目を輝かせた。^{かがや}「いつもすまん」

「別にいいよ、これぐらい」

雄治は、どっこいしょと立ち上がり、紙袋をつまみ上げた。すぐそばの仏壇は扉が開いたままだ。そこの台にあんぱんの入った袋を置くと、立ったままで鈴を二度鳴らし、元の場所に座った。^{こがら}小柄で^や痩せているが、八十歳近くになっても姿勢だけは良い。

「お前、晩飯^{ばんめし}は食べたのか」

「会社の帰りに蕎麦^{そば}を食った。今夜はこっちに泊まるから」

「ふうん。芙美子^{ふみこ}さんにはいってあるのか」

「ああ。あいつも親父のことを心配してたぜ。体調はどうなんだ」

「お陰様で問題ない。わざわざ様子を見にきてもらうまでもない」

「せっかく来てやったのに、その言い方はないだろ」

「心配無用と言ってるだけだ。ああそうだ、さっき風呂^{ふろ}に入って、湯はそのまましてある。まだ冷めてないだろうから、好きな時に入れればいい」

会話の間中、雄治の視線は卓袱台の上に向けられていた。そこには便箋^{びんせん}が広げられている。傍らに封筒^{かたわ}が置いてあった。表書きは、ナミヤ雑貨店様へ、となっている。

「それ、今夜来たのか」貴之は訊いた。

「いや、届いたのは昨日の深夜だ。朝になって、気づいた」

「それなら、今朝、回答しなきゃいけなかったんじゃないのか」

『ナミヤ雑貨店』への悩み相談の回答は、翌朝^{よくあさ}牛乳箱に入れられる

—それが雄治の作ったルールのはずだ。そのため雄治は午前五時半には起きる。

「いや、夜中だ^{やちゆう}ということで相談者も気を遣^{つか}ったらしい。回答は一日遅れでいいと書いてある」

「ふうん、そうなのか」

おかしい話だ、と貴之は思った。なぜ雑貨屋^{てんしゆ}の店主が、他人の悩み相談に応じねばならないのか。もちろん、こうなってしまった経緯はわかっている。何しろ、週刊誌^{しゆざい}が取材に来たほどなのだ。あの直後は相談件数が増えた。真面目な内容もあったが、多くがふざけたものだった。明らかに嫌^{いや}がらせと思われるものも少なくなかった。極めつけは一晩で三十通以上の悩みが持ち込まれたことだ。明らかに一人の手によるものだった。内容は全てでたらめなものだった。ところが雄治は、それらにさえも回答をしようとした。さすがにその時には、「やめろよ、そんなこと」と貴之は雄治にいった。

「どう考えたって悪戯^{いたづら}だろ。真面目に相手をするなんて馬鹿馬鹿しいじゃないか」

しかし老いた父親^おは一向に懲^{いっこう}りてい^こる様子がなかった。それどころか、「お前は何もわかってないなあ」と哀れむ^{あわ}ようにいうのだった。

何がわかってないのか、とむきになって詰問^{きつもん}すると、雄治は涼^{すず}しい顔をしてこういった。

「嫌^{いや}がらせだろうが悪戯^{いたづら}目的だろうが、『ナミヤ雑貨店』に手紙を入れる人間は、普通の悩み相談者と根本的には同じだ。心にどっか穴^{あな}が開いていて、そこから大事なものが流れ出しとるんだ。その証拠に、そん

な連中でも必ず回答を受け取りに来る。牛乳箱の中を覗きに来る。自分が書いた手紙に、ナミヤの爺さんじいがどんな回答を寄越よこすか、知りたくて仕方がないわけだ。考えてみな。例え出鱈目でたらめな相談事でも、三十も考えて書くのは大変なことだ。そんなしんどいことをしておいて、何の答えも欲しくないなんてことは絶対にない。だからわしは回答を書くんだ。一生懸命、考えて書く。人の心の声は、決して無視しちゃいかん。」

実際に雄治は、その同一人の手によるものと思われる三十通の悩み相談の一つ一つに真面目に回答を書き、朝までに牛乳箱に入れた。そして確かに店を開ける前の午前八時には、それらの全てが持ち去られていたのだった。その後、同種どうしゅの悪戯は起きていない。代わりにある夜、『ごめんなさい。ありがとうございました。』と一文だけ書かれた紙がほお放り込まれた。その筆跡は、三十通の主のものと酷似こくじしていた。それを誇らしげに息子に見せた時の父親の顔を、貴之は忘れられない。

多分生き甲斐がひってやつなんだろうと思った。約十年前、貴之の母親が心臓病でこの世を去った時には、雄治はすっかり元気を無くしてしまった。すでに子供たちは全員家を出ていた。一人きりの孤独な生活は、間も無く七十歳になろうという老人から生きる気力を奪い取るには、十分なほど辛いものだったようだ。

貴之には二歳上の、頼子よりこという姉あねがいる。だが彼女は夫おっとの両親と同居どうきょしており、とても頼るわけにはいかなかった。雄治の面倒を見るとすれば、貴之たよしかない。とはいえ彼も世帯しやたいを持ったばかりの頃だった。当時は狭い社宅暮らしで、雄治を引き取る余裕などなかった。

そんな子供たちの実情をわかっていたのだろう。雄治は元気をなくしながらも、店を閉めるとは決して言わなかった。貴之も、そんな父のやせ我慢に甘えていた。

ところがある日、姉の頼子から意外な電話がかかってきた。

「びっくりしたわよ。すっかり元気になってるんだもの。お母さんが死ぬ前より生き生きしてるかもしれない。あれなら一安心。当分は大丈夫だと思う。あなたも一度顔を見に行ってみたら？ 驚くわよ、きっと」

久しぶりに様子を見に行ったという姉は、声を弾^{はず}ませていた。さらに彼女は興奮^{こうふん}した口ぶりで、「どうしてお父^{とう}さんがそんなに元気になったかわかる？」と訊いてきたのだ。貴之がわからないというと、「そりゃそうよねえ、わかるわけないと思う。私なんか、それを聞いて二度びっくり」と続けた後、ようやく事情を話してくれたのだ。お父^{とう}さんは悩みの相談室まがいのことをしている、と